

第1章 開催の挨拶

田中 優子

(法政大学総長)

皆さま、ようこそおいでくださいました。本日は学芸員課程設立 50 周年です。まずこの 50 年の間ご尽力いただいて、この国家資格を取った学生を非常に多く卒業させてくださった先生方に心よりお礼を申し上げます。また、きょうこの 50 周年を記念して、ここに参加してくださった方々にもお礼を申し上げます。

この 50 年ですが、1964 年に博物館学芸員課程を設置しています。現在、全国の大学でいうと 37%、私立大学でも 35% くらい、この課程が設置されていると伺っていますが、1960 年代はどれも 10% 前後だったのではないかと思います。そういう非常に早い時期に法政大学はこの学芸員課程を設置いたしました。当時の教員たちに先見の明があったと思っています。

また 2000 年にボアソナード・タワーが竣工したときに、14 階に博物館。博物館といっても小さいものですから、博物館展示室と私たちは呼んでいますが、そのような施設ができました。ご存じのように学芸員の養成にはどうしても実習が必要で、多くの場合には学外の博物館、美術館をお借りして実習しているわけですが、この展示室があることによって、外を全くお借りしないわけではありませんが、そこを拠点にすることができたということ、これもまた大きな成果だろうと思っています。

しかし、私はまだ二つほど問題があると思っています。一つは、日本の学芸員は世界でいうキュレーターという立場に比べると非常に地位が低いのではないかと思います。私も江戸時代関係で世界のさまざまな博物館、美術館に行きますが、そのキュレーターの方たちはほとんど、私たち大学教員と同じ研究者です。大学で教えていることもありますし、そのようなキュレーターの立場や社会的地位に比べると、日本の場合にはまだまだ学芸員はさまざまなことをこなさなければならない状況になっていて、大変忙しい思いをしています。

国内でもいくつかの美術館、博物館に関わっていますが、そこでも皆さん、ご自分の専門をちゃんとお持ちです。もちろん図録にも大変良い原稿をお書きになっていらっしゃるのですが、それとともに館

内のさまざまな管理的なこともこなさなければならず、拝見していても大変だなと思います。

そのようなさまざまな能力、多様な能力が必要とされるのが学芸員です。そういう多様な能力を大学で育てていこうとしているわけですが、そうであるのならば社会的な位置付けも、もっと高くなる必要があります。

またもう一つ問題だと思っていることがあるのですが、それは法政大学の中で博物館の機能がまだまだ不足しているということです。拠点としては本学のボアソナード・タワー 14 階の展示室がありますし、そのフロアで皆さん、いろいろなことをやったださっているのですが、もっと多くの施設、空間が欲しいところです。

現在のところ、大きな博物館をつくることは望めません。しかし、世界の博物館の動向を見てみると、空間に頼るといよりも、徐々にデジタル化をして世界中に公開しているという状況になっています。

これは図書館の問題でもあるわけですが、そういうデジタル化と世界公開を責任を持って行うようになると、むしろこの大学にはこういうものがあるということが行かなくても分かりますので、大変大きな効果があるわけです。それは大学の位置付けを高めることにもなりますし、また大きな社会貢献にもなります。

本学は都心にあり、空間に頼れないということがありますので、アーカイブとしては多摩キャンパスがふさわしく、そのようなアーカイブ空間を確保すること。そして公開についてはデジタル化を進めるということ。その両方を考えていく必要があると思います。またそれは全世界的な傾向でもあると考えています。

そういうことも考えるわけですが、やはり展示スペースは欲しい。これはどうしてかということ、耐震の関係でボアソナード・タワーの 14 階に置いたということがあります。それはそれで仕方がないし、正しい選択だったと思うのですが、外から法政大学を訪れてきた方たちは、いったいどこに展示室があるのか分からない。目的を持っていらっしゃる方はいいのですが、校内にお入りになって、すぐには

気が付かないということがあります。それはもったいないと思っております。

そこで昨年度から学部長会議を中心にして、学内の複数のところに展示機能を持たせたいのではないかという提案もなされています。例えば法政大学を受験したいと思いたいになる方やそのご父兄の方たちが、法政大学ってどんなところなのだろうと思ったときに、その展示が見られる。

おそらくそれは入学センターなどがあるところ、その周辺ではないかと推測するわけですが、そのように立ち寄りやすいところに大学史関係のものが展示されているという状況も必要なのではないかと思えます。またそこに立ち寄ったときに、14階で展示をして活発に動いていることが分かる。

私も国際日本学研究所のシンポジウムのときに、シンポジウムと並行して14階の展示室を使いました。シンポジウムにいらっしゃった方がちょっとした空き時間に展示をご覧になって、そしてまたその展示を基本にしたシンポジウムに参加するというやり方をとったことがあります。これは単に映写してご覧いただくというだけではなくて、実物に触れるということで大事な機会でした。とても効果的な方法だと思えました。そのように講演やシンポジウムと組み合わせることもできます。

そういう意味では14階、あるいはもっと下のほう、あるいは他の空間を展示スペースにしたいと考えていたところ、会議で早稲田大学に行きましたら、校内のいろいろなところに早稲田の町や早稲田大学の校内を絵にしたものがあるんです。特に工事現場、今、法政大学もそうですが、工事をしているときにはどうしても白い鉄板で覆うわけですね。その鉄板の表側に、町の様子や早稲田大学の様子が絵になっているのがたくさん張られています。

非常にいいなと思いましたら、それを描いた方に、ついこの間お目にかかることができました。藪野健先生という方で、この方は「キャンパスがミュージ

アム」という図録を3冊お出しになっていらっしゃいます。その、キャンパスがミュージアムという考え方が素晴らしい。この方は早稲田の名誉教授でいらして、画家でもありますので、ご自身でお描きになっているのですが、まさにキャンパスがミュージアムになるような、そういう取り組みが大学でも可能だということを教えられました。そのようなこともこれから考えていきたいと思えます。

今、法政大学は工事現場になりつつあります。55・58年館がもう工事に入っていて、これが長い期間続きます。そのことは私にとって大変気になっていることですので、それをきっかけにして校内がミュージアム的であるということや、あるいは大学の歴史が分かる、そういう仕組みにしていきたいと思えます。

本当にそういうことが実現できそうなときは、ぜひこの課程を受けている学生たちにも協力してほしいですし、あるいは教えてくださっている先生方にもぜひご協力をいただきたいと思えます。

いずれにしても、この課程はこれから世界的にも重要な課程です。大学だけではなくて日本国内の美術、博物に関わるさまざまなものを展示して公開していくということは非常に重要な文化的な営みになりますので、もう学芸員ではなくキュレーターと言ったほうがいいかもしれませんが、キュレーターの役割はますます重要なものになります。

そういう意味で法政大学としてもキュレーターの養成にはさらに力を入れていきたいと思えます。きょうは学生さんたちが集まってくださって本当にうれしいのですが、ぜひこの課程を取って、資格を取得し卒業していかれることを期待しています。頑張ってください。

では、キャンパスがミュージアムという思いをお伝えして、私の挨拶に代えようと思えます。きょうは1日、よろしく願いいたします。